

入唐求法巡礼行記の世界の背景 渤海国家の交易と交流

鈴木 靖民（國學院大學文学部教授）

1. 渤海の国家と民族集団

本稿で取り上げるのは、『入唐求法巡礼行記』に描かれた9世紀前後の唐をはじめとする東アジア世界の人とモノの交流の様子を顕著に窺わせる渤海の国家と交易・交流に関するものである。

ユーラシアの東端、中国の東北からロシア極東にかけては、古来今日に至るまで多数の民族集団が存在している。7世紀末葉、この広範な地域に居住し、中国の人たちから靺鞨と汎称された諸集団（七部）のなかで、南部の粟末の首長、乞乞仲象が高句麗の遺民たちとともに遼東半島營州（朝陽市）で起こった松漠都督で契丹人の李尽忠たちの唐に対する反乱に呼応して唐軍を退け、698年、牡丹江上流域の吉林省敦化市に政権を立て、振国（震国）と称した。敦化盆地は粟末靺鞨の居住地であり、乞乞仲象の出身地であろう。713年、大祚榮が唐から渤海郡王に封じられ、以後、渤海と号する（唐に渤海国の号を認められるのは762年、大欽茂の時である）。彼は乞乞仲象と同一人物か、子であろう。これが渤海の国家と文化のプロローグである¹⁾。

渤海は、強制移住された人々を含むもとの高句麗人や肅慎・挹婁・勿吉の系譜を引く靺鞨（江畔の民の意かという）諸集団などの多様な民族・文化状況を示し、西に接する唐、契丹・突厥・奚との争いが頻発する東アジア有数の境界領域において、長年に及ぶ国際緊張や戦乱を契機にして誕生したのである。靺鞨人のなかでも南部の粟末・白山などが連携して成った組織体が公的権力を形成させ、やがて東ユーラシアの構造的な中心たる唐の王朝に朝貢し、その冊封を受けることにより政治的・経済的・文化的関係を結び、遂に国家形成を達成するに至る。

建国者の大祚榮はもと高麗（高句麗）の別種とされ（『旧唐書』渤海靺鞨伝）、あるいは粟末靺鞨の高麗に属したものといわれ（『新唐書』渤海伝）、この史料が今日、渤海は靺鞨人の国かどうかの属族問題の議論の根拠となっている。前者は高麗といい、後者は粟末靺鞨といい、説を異にするが、殊にこの南部は多元的な民族集団が住む社会であり、粟末の乞乞仲象と唐風の名の大祚榮は同一か父子かもしれないにせよ、ともに高麗の集団あるいはその政権に関わり深かったことを伝える点は否定できない。渤海については、大連市旅順口区にあった714年の唐から渤海に赴いた使者崔忻の鴻臚井碑に「勅持節宣勞靺鞨使」とあり、9世紀の西安出土の都管七国六弁銀製盒子の蓋に人物像を描き、「高麗国」と陰刻する（当時実際管轄していた国ではなく、仏教思想あるいは理想化の色彩を帯びているとの異説もある）。日本の『続日本紀』の渤海関連記事に、渤海郡は「旧の高麗国なり」とあり、渤海国王の啓（外交文書）に「高麗の旧居を復す」とあり、平城京出土木簡に遣渤海使を「遣高麗使」と記すので、8世紀日本の皇族・貴族たち支配層は渤海の国家を高麗の継承国と認識して、高麗と号することがあり、渤海使も国交を続けるためにそれに合わせていたのであろう（一方、長屋王家跡出土の習書木簡には「渤海使」と記している）²⁾。

粟末靺鞨のなかには隋唐に属する類型の人たちもいた。隋末に内附した首領突地稽の子の李謹行は「その先、蓋し肅慎の苗裔、涑沫の後なり」とされ（墓誌）、唐に出仕して、營州都督、鎮軍大將軍、右衛員外大將軍を歴任した。また高崇文は先祖が渤海人で幽州生

まれ、貞元中、平盧軍からスタートし、軍人や節度使など将士として活躍した（『旧唐書』151、『文苑英華』892）。李希烈は燕州遼西の人、渤海人とされるが、将士であった（『旧唐書』145、『新唐書』225中・逆臣）⁴⁾。

渤海は唐との間に「朝貢道」（『新唐書』）という王都から鴨緑江を経て遼東半島沿いから山東半島に達する交通路を開いた。旅順の鴻臚井碑はその名残である。渤海は南の新羅のほか、北部の黒水靺鞨との緊張状態を持続させ、そのなかで靺鞨諸集団への服属策を取り、首領と呼ばれる各地の支配層との間、また首領同士の間を結束を強化し、国家としての多方面にわたる統治活動を繰り広げる。719～737年、大武芸の代に鴨緑江流域から北朝鮮咸鏡南道南部にかけての狩猟・漁労・農耕（鋤を用いた牛耕など）・養蚕地帯を支配下においた。それゆえ初期の支配層が信仰した仏教文化には、瓦文様や二仏並座像に見られる通り高句麗の影響が認められる（時代を経ると、渤海の墓葬制の場合、火葬や合葬の習俗のほか、封土墓は高句麗の墓葬と著しく異なるが、墳墓の構造・形状・副葬土器に高句麗文化と唐文化の影響が見られるといわれる。また土器の器形には地域差があるが、7世紀以来の靺鞨土器を継承し、その延長線上に高句麗土器の影響を受けて渤海土器が形成されるとする説がある）。

2. 五京と交通路

738年の大欽茂の即位以後、弘涅・鉄利・越喜・虞婁などの北部の靺鞨諸集団を服属させた。この地域は狩猟・漁労・牧畜・養豚を主な生業としていた（最近発掘された黒龍江省海林市細林河渤海遺跡では、家畜として豚・狗をはじめ牛馬の飼育を主として、夏季の灌木の茂る丘陵でのノロ鹿・マンシュウアカ鹿・狼など、森林での罽、河沼での鯰などの狩猟経済を副次とした活動を行い、その骨角は鏃・刀・紡錘車・飾具・帯鉤など様々な器具の加工・製作に使われたことが具体的に推測されている。皮革・食料・薬種などとしても利用されたことはいうまでもない）⁵⁾。やがて818～830年、大仁秀の代までに中国の府州県制に倣って、地方を15府・62州に区分し、直属の3つの独奏州を置き、100を超す県を設け、府治・州治・県治を行政拠点として領域を四囲に拡大しようとした。人口は最も多くて300万人程度と推算されている。

地方支配の進展と対応して、唐に朝貢を続け、その支配機構をモデルとした宣詔省・中台省・政堂省の3省、儒教的徳目を付けた忠・仁・義・智・礼・信の6部、中正台、殿中寺などの中央官制、左右猛賁・熊衛以下の軍制を整備させ、安定した国家体制を築いた。支配層はいわば周辺的な国家として中華風の律令制国家の樹立を目指したのであり、墓誌・文字瓦や壁画に見られる通り漢字の使用、服飾などの唐風化、唐の学問・文化の導入と併せて、「遂に海東の盛国と為る」（『新唐書』渤海伝）と讃えられた所以である。なお、王権中枢の権力構成は9世紀の場合、王・王妃・副王（長子）という王の最近親と長史・平章事という宰相クラスから成っていた⁶⁾。

750年代以後、肅慎の故地とされ、各地に通じる交通の最要衝を上京としたのをはじめ、五京（王都）を定め、各京の周囲とそこから延びる河川などの交通路に沿って山城や土城（平城）をいくつも置き、長城・関隘を築いて防衛線を形成し、かつ地域の支配や文化の基地とした。王都は敦化市の「旧国」（拠点は英勝遺跡などか）から中京顕徳府（吉林省和竜市西古城）、さらに上京竜泉府（黒龍江省牡丹江市寧安市渤海鎮）、東京竜原府（吉林

省琿春市八連城)、戻って最後に上京竜泉府へと4度変遷したとされる。このうち2度にわたって長年王都となった上京は最も重要な都城であり、外城を土塁で区切った東西に長く四角い京城全域は条坊の区画がグリッド(碁盤の目)状に敷かれ、中央北部に位置する宮城と皇城(内城)には国王・王妃・東宮・王子女などの瓦葺きの邸宅や宮殿群が建ち並び、離宮や禁苑もあった。京内には東西市、仏教寺院も点在して渤海の政治・経済・文化の中心となった。占地は外部勢力に対する防衛拠点という性格を有する。大規模な都城プラン自体は完成までに2、3度の変遷があったが、定型都市的な構成は唐の都城制を模倣したことによる。日本の平城京に比べてより唐に忠実であったとされる。外城の北に突出した部分、大明宮相当宮殿の欠如(宮城北側の内苑が大明宮に当たるとの説もある)、宮城内を区画する石垣、宮殿のオンドル施設など独自性もある。上京を囲む形で牡丹江が西から北に流れるが、西北に架かる橋を渡った三陵屯には壁画のある切石積みの墳墓が何基もあり、後期の王族の陵園が営まれた。同じく牡丹江を渡った西郊には上京に居住した人々の一大墳墓群である靺鞨期以来の虹鱒漁場墓地があった。8世紀末葉の王都、東京(八連城)は中国・ロシアの国境を越えると日本海に約40キロメートルの所に位置し、「日本道」という日本との交通路の起点となり、上京時代には中継地点であった。この上京から東京を経て日本道を通る沿線には汪清県の紅雲寺跡をはじめ寺院が多く分布し、宿泊にも供されたであろう。琿春東南郊の石頭河子古城は日本道の駅館(宿舎)と、都城守備を兼ねる機能をもったと考えられる。「日本道」の終点に位置するのが図們江(豆満江)の西約20キロメートル、ロシア沿海地方・ハサン地区のポシエツ湾のエクスペディツィン湾に面するクラスキノ遺跡(土城)である。城内には寺院を含む建物や瓦窯などの生産工房があり、土塁の城外西側には墓群が営まれていた。2003年、石郭墓1基が発掘された。ここの中国・朝鮮名は清代には顔楚・眼春、近代にも煙秋であり、今も遺跡の東側を流れ、日本海に注ぐ川はイエンチュウ川と呼ばれる。すなわち東京竜原府下の塩州(竜河郡)に当たる。もともと四角い土城の内側から南門に向かっては道路跡が認められ、すぐ南は海岸なので、日本との交通・交易の発着地の港湾であり、出土する唐の陶磁器、中央アジア系の遺物から、ソグド人商人の居住したことも想像されている。

西京鴨緑府(吉林省白山市臨江市か)は唐の山東・登州に至る「朝貢道」の途上にあり、南京南海府(北朝鮮咸鏡南道北青郡青海土城)は日本海に沿って南下し、新羅の泉井郡に通じる「新羅道」を押さえたであろう。8世紀半ば以降、日本の遣唐使の通った「渤海路」(『続日本紀』)の一部もこの道のことかもしれない。ただし、渤海を介する日唐間の交通は日本海を渡り「日本道」から「朝貢道」を経て入唐するルートが主要であろうか。このほか、長嶺府を通る「營州道」、扶余府を通る「契丹道」などがあった。このように渤海の都城と水陸の道路は内部を結ぶだけでなく、外との様々な交流のために開かれていた。

これらの交通路を利用した交流には外交・文化・経済など多様な側面があるが、ここでは交易に焦点を定めたい。

3. 首領と生産・交易

上述のように、渤海の社会は各種の靺鞨人、もとの高句麗人などの諸集団から構成される多民族社会であった。日本の『類聚国史』殊俗部・渤海上に『日本後紀』の編者が渤海初期の粟末社会を首領中心に描く記事があり、『続日本紀』の引く渤海使に託した渤海への

外交文書に、相手を渤海国王に次いで「官吏・百姓」または「首領・百姓」とする表現などにより、「首領」と呼ばれる存在とその配下の大多数の「百姓」を基礎にして渤海の社会が成り立っていたことが分かる。727年、最初の渤海使が上陸地で大使などを失い、平城京に入った時の代表は「首領」であり、841年の渤海使の構成を宮内庁書陵部蔵の壬生家文書の中台省牒写しに見ると、105人中、「首領」（大首領）が65人と半数を超えていた。716年以後の唐への「朝貢」使にも「首領」（大首領）がしばしば加わっている。「首領」とは渤海の固有語ではなく国際語としての漢語を用いたものであり、渤海各地の多様な集団の支配者を指すが、彼らが地域や集団の多数の住民を組織し、生産物を管理・分配して統制し、渤海国家に服属して以後も彼らに体现される生産・経済活動の維持を主とする伝統的な支配秩序をそのまま承認され、外交・交易にも関わったものと考えられる。その首領は、渤海使のなかに大首領がいるように、幅広い地位・階層の下級官吏を包摂する語であるが⁶⁾、他方で、厳密には地方の州などに属しても、何ら官職・官位を有さないのが官制の序列の外にあったとする見解もある⁷⁾。

渤海人の生業・生産には、上にも触れたように自然環境や地理的条件により豚・狗・牛馬を飼う牧畜、狩猟・漁労を主として、ほかに農業・養蚕があった。僅かな文献史料と出土品によると、繊維製品・工芸品・鉱産品・土器・陶磁器・磚瓦も生産された。これらの多様な生産物は国内集団間での流通・消費や国家への貢納に充てられたが、日本や唐への国際間の交易にも活用された。『続日本紀』以下の日本史書、『冊府元龜』朝貢などによれば、「朝貢品」とされた交易品には、虎・熊・貂・豹・海豹などの海陸獣の毛皮、鷹鷂の羽根、昆布、干魚類、白附子・人參・蜂蜜などの薬材、鯨の眼球・麝香・牛黄・狗・瑪瑙などの天然の特産物ないし中継品があった。各地の名産として挙げられる昆布・馬・布・綿・紬・鉄などは（『新唐書』渤海伝）、外国への輸出にも供されたものであろう。

渤海国家の外交相手は日本・唐であり、新羅とはほとんど没交渉であった。交易は国際関係を中心にして進められた。日本とは727年から919年まで渤海使34回、遣渤海使12回の往来を通して頻繁な交流が行われたが、渤海は当初、黒水靺鞨との抗争に起因する唐との関係悪化のなか、新羅への対抗という目的を籠めつつも、その後、実態は交易活動に終始した。771年来日した17隻もの船団のように（772年、帰途、現在の石川県富来町福浦に当たる福良津に安置された）、8世紀後葉になって活発化する交易は仲介者的な商人も同行した可能性が強く、彼らは首領層に含まれるであろう。824年、右大臣藤原緒嗣がこうした渤海使の本質を「実にこれ商旅」と非難して以後は、派遣を12年に1回と制限したが、その後も一行の過半数を首領が占めていた。首領たちは自らの支配地で獲得した毛皮などの特産物を交易品として携え、上陸地の北陸など日本海側、さらには平城京・平安京の客館などで公私の交易を行ったのである。日本から渤海への公的な「回賜品」には、絹・紬・錦・綿・羅など、時に黄金・水銀・金漆・椿油・水精・檳榔扇などの繊維製品や特産物が贈られた。その大半は首領に与えられることに規定されていた（『延喜式』大蔵省）。

9世紀以後、唐・新羅との公的交流を欠くなかで、日本の皇族・貴族にとって渤海使がもたらす毛皮などは羨望の的であった。醍醐天皇の皇子、重明親王が春日祭見物の時、渤海使の前に黒貂の裘、つまり毛皮を八枚も重ね着して現れ、驚かせたというエピソードは有名である（『江家次第』春日祭）。正月の七日会式に渤海使が参列する際には儀式の催される豊楽院に靨の毛皮を敷くことが定められており（『内裏式』）、祭礼・仏会とかかわ

るイメージとともに、毛皮こそが渤海を象徴し、それに比肩するものと強く意識されていたことを物語る。同時に、めったにない国家間の外交での疑似的な唐物として儀礼の場における政治的利用がなされたものでもある。

渤海使は文物や情報提供の面で唐との中継的役割を果たしたが、ほかに渤海からの舶載品の実物と見なされるのには、奈良の正倉院宝物の彩画用や薬材の臍密と薬用の人參がある。奈良県明日香村の坂田寺跡出土の三彩壺・大盤・獣脚（香炉か硯）の破片は渤海産の三彩とされる。これまで渤海の三彩は中国・ロシアの11の都城や寺院遺跡・墳墓で出土例があり、その生産には唐からの工人の移動、つまり技術移転を考える説もある。また施釉陶器も各地で調査されている。

平城宮・平城京跡でも黒陶片などが5例出土し、渤海産の可能性があると考えられている。北海道余市町の大川遺跡の黒色土器（壺）も一時、渤海末・遼・女真初期の土器かとされたが、製作技法・胎土が違うという。2003年11月、秋田県仙北町払田柵跡西側の鍛冶工房跡で鋸歯文のある黒灰色の土器片が出土し、渤海産かと注目されたが、文様などから推して北海道・東北（陸奥）産の疑いがある。実物でないが、長屋王家跡木簡には「豹皮」を買うための銭の付札があり、豹皮を渤海産とする説がある。「豹皮」は『続日本紀』や『三代実録』の渤海使による日本への「方物」のなかにも見られ、唐への貢献物にも見える。「豹」字が貂字に通じて使われたか単なる誤記でないなら、渤海に豹が棲んでいたか、北方あたりからの中継品であったと考えられる。なお豹皮については、奈良時代以来、官吏たちが儀式の時の衣服の横刀の帯飾りや鞍具として使っていた（『続日本紀』靈龜元年九月己卯条など）。

唐との関係は「朝貢」貿易である。唐への朝貢は713年から926年までの214年間に、10世紀の後梁・契丹への使も含めると、そのうち半分弱の90年について約150回もある。1年に2～5回のこともあり、一時期における最多の朝貢記録であった。朝貢品は日本に対するのと同種であるが、そこでは冊封・納質入侍・朝賀などが行われた。遣唐使は『冊府元龜』などに単に「使」と記す場合が多いが、詳しく見ると王族、首領、臣・官吏に分けられ、うち首領（大首領）は8世紀前半までで、以後姿を消す。

この変化は渤海の靺鞨諸部支配の拡大過程と対応関係にある。首領たちは地方官制の整備にともなって府州県レベルの官吏への身分上昇を遂げ、なかには地方官のまま使節幹部に任用される例もある。渤海は朝貢の最初期から唐に「就市」すなわち公的交易を要請し、毎年、市での名馬の交易、鷹鷂の歳貢、王子らによる熟銅の交易等々、交易本位の外交を続けたが、その主要な担い手が首領層にほかならなかった。

渤海から唐に「瑠璃櫃」とともに純紫色で超薄手の「紫瓷盆」が貢がれたと伝えるが（『杜陽雜編』）、1964年、中朝聯合考古隊が上京竜泉府で発掘した紫褐色と紫色の磁器片はこれに類するとされる⁶⁸。

他方、唐からの下賜品として「器皿」が見えるが（『冊府元龜』）、陶磁器の交易は注目に値する。上京の宮城西の物置（倉庫）跡で発見された多量の陶器群のなかには河南省鞏義市（鞏県）の三彩を含む唐の施釉陶器がある。ロシア沿海地方では、北部は渤海の率賓府、南部は東京竜原府の管轄下に入るが、その州県の地域拠点に当たる土城から9世紀以降の唐の陶磁器が出土する（2004年2月現在、44点）。ハンカ湖（興凱湖）の東南、ウスリー川東岸にある最北の渤海遺跡のマリヤノフカ土城、その南に分布するノボゴルデフカ土

城・ノボゴルデフカ集落・ニコラエフカⅡ土城、南端のクラスキノ土城などであり、マリヤノフカ土城では浙江省越州窯、ニコラエフカⅡでは河北省邢州窯、江西省景德鎮窯、クラスキノ土城では四川・湖南・浙江・陝西・河北・河南各省の窯それぞれの産とされる陶磁器片が出土する（なかに形態上、唐の磁器の変形が含まれるともいう）。また綏芬河の西の支流、クロノフカ川流域の率賓府の要地に位置するアプリコソバヤ（杏）寺院跡からも越州窯産の青磁片が出土する。産地別では越州窯が最も多く、およそ半数を占める。

これらの陶磁器の交易ルートは、『入唐求法巡礼行記』に現れる人々の主要な舞台と重なり合う。

唐南部で生産された陶磁器は、長江（揚子江）三角州、すなわち杭州湾の越州（紹興市）・明州（寧波市）に周辺の窯から集められ、東は日本・新羅・渤海に運ばれ、西は遠くエジプトやイタリアまでも及んでいる。渤海へは船積みされて、東中国海から黄海を楚州（淮安市）・海州（連雲港市）などを陸伝いに北上し、山東半島の密州（膠州）、青山浦（成山角）を経て登州都督府（蓬萊市）に至ったと思われる。黄海・渤海の両方に臨む登州は北の物資の集散地で、新羅館・渤海館もあり、互市、つまり公的な対外交易の場であった。陝西省・河北省の陶磁器も登州に搬出されたであろう。陶磁器などは山東を発って黄海・渤海を通り、遼東半島に立ち寄るなどして東側の渤海領域に入り、鴨緑江河口から「朝貢道」を溯り西京・中京を経て、上京をはじめとする都城や各地の支配拠点、首領の居地に着き、消費されたと推定される。沿海地方へ行くには山越えと水系を辿るか、朝鮮半島を回って日本海を大陸沿いに航行し「日本道」につながるルートを取ったであろう。唐から日本経由の運送によるルートも考えられる。

最近、山東の蓬萊市（登州）では湖南省長沙窯産の唐代の注口と取っ手のあるポット型をした黄釉褐彩貼花執壺が出土し（登州博物館蔵）、同形の青釉褐彩人物壺が膠州湾西北側の膠南市膠南鎮でも出土すること（膠南博物館蔵）を確認した。類似するものがクラスキノ土城でも出土している⁹⁹。また日本では平安京での出土もあるが、石川県小松市の古代山岳寺院である浄水寺遺跡からも同類の長沙窯も壺が出土している（石川県埋蔵文化財調査センター蔵）。さらに福岡市鴻臚館跡でも発見されている。なお膠南市塞里鎮出土の唐の青釉小型甕はいわゆるイスラム陶器であり（膠南博物館蔵）、日本の鴻臚館跡や福岡市有田遺跡群、多々良込田遺跡群、博多遺跡群、久留米市の筑後国府跡の出土品などにも類例が知られる。膠州市はもとの密州板橋鎮に当たり、宋代に遼の圧迫で登州が閉港されたのに代わり、1088年市舶司が置かれて日本・高麗との交易ないし朝貢、国内沿海の明州・広州・泉州などと結ぶ貿易港として商賈が集まり繁栄した¹⁰⁰。特に交易と外交のために高麗館が置かれたという。

これらの資料から推測して、唐の広州・福建・浙江－山東（密州・登州）－日本の大宰府・鴻臚館－平安京、または日本海沿岸－ロシア沿海地方（塩州＝クラスキノ）という陶磁器の道が浮かび上がる。また山東－朝鮮半島（新羅など）－日本海経由というルートがあってもよい（なお、日本国内では国家・王権と関わる陶磁器など舶載品の分配・消費・流通が問題である）。

渤海をめぐる東北アジアの交易の荷い手には、首領を含む国家間の公的使節とは異なり、唐・新羅の商人、渤海の商人がいたことが平安期日本の文献史料により知られる。東中国海から黄海にかけての海上活動で、まず陶磁器を携えた唐商人が博多津や大宰府で交易を

行う。彼らは越州・明州の商人で、福州・泉州などで南海産の物資も積んだのであろうか。なかでも9世紀前葉の周光翰・言升則は新羅船で日本に着き、そこで渤海使と出会い、渤海に向かった。彼らは唐江南－日本－渤海－唐というサイクルをもって多国間の交易を行った商人たちである。9世紀後葉の李延孝は越州・台州と日本の間を8度も往来し交易を行ったが、「渤海商主」とも称され、渤海を主な拠点とし、日本と浙江にも拠点を構え、遠距離交易のため海上を縦横に行き交う国際商人の典型であった。道教經典の『金液還丹百問訣』には、李光玄もしくは彼が知り合った道士で浙江から山東あたりの地域を主な舞台にして中国・日本・渤海を股にかけて交易に従事した伝説上の人物の存在も見える。渤海商人が渤海国に属するとすれば、これも首領層に含まれるに違いない。このほかにも、東北アジアの諸国間を移動・交流する商人たちが大勢いたことは想像に難くない。

ところで、福岡市博多遺跡群や大宰府跡では、軒平瓦の下顎に指で押さえて波状文を着けたものが出土している。大谷瓦窯で焼成されたことも明らかであるが、この造瓦技法は源流が漢代の山西北部から遼寧・内蒙古にかけて中国長城地帯にあり、北魏や高句麗に継承されたが⁽¹¹⁾、6～7世紀の韓国扶余軍守里跡出土の指頭文瓦（国立扶余博物館蔵）も同類であろう。それに、この文様は渤海の瓦にも共通するので、時代の上から文献史料で知られるような渤海と日本・大宰府の間の人や技術の交流を裏付けるものかもしれない⁽¹²⁾。

こうして東ユーラシアの海域で、必ずしも国家の朝貢など公的交易に則らずに、国境を越えて各地を渡り歩き、多様で複線的な交易を展開した人々が多数認められるが、彼らの間には一定のシステムがあったのか、港市をつなぐネットワークが形成され、その紐帯による異文化交易形態がどのように存在したのか、今後追究すべき点である。

このほか、遠くロシアのセミレーチェを起点として極東に達する“黒貂の道”を通り、中央アジアや唐や渤海との交易を担ったソグド人商人の活動があったことも、早くよりE・シャフクノフ氏によって想定されている。この“黒貂の道”は渤海の日本道を通して日本に到達するという。ユーラシアの東西をまたぐ遠距離交易に関しては、最近、香港の許曉東氏が、遼の墳墓から出土する装飾品などに使われる琥珀器の原料の産地を構成成分の類同から有名なバルト海に求め、『遼史』本紀あるいは『契丹国志』南北朝羈献礼物に西域各地から契丹に3年に1度遣使・貢献するなどある記事によって、同地から西アジア、中央アジアの商人により草原のシルクロードを通して運ばれた可能性が極めて高いと論じている⁽¹³⁾。

これらの壮大なスケールの交易は、西から来る商人たち（その代表例としてのソグド人商人）を活動の荷い手と見なすが、ユーラシア各地を結ぶ大動脈としての中央ユーラシアの歴史的な位置づけと意義を考える上でも、見逃し難い提起である⁽¹⁴⁾。

ともかく、渤海で交易に当たったのは支配層としての首領たちであり、まず日本・唐への使節の構成員としての公的な「首領」となるが、それ以外にも独自に唐・新羅を相手にして国際的な交易をする商人群やリーダーがいたものと考えられる。もともと政権の基盤勢力となった粟末靺鞨などは穢の後身とされ、5世紀の「東海賈」（高句麗広開土王碑）にもつながる伝統的な狩猟・漁労民であり、交易民でもあった。白山靺鞨も交易民の東沃沮の後裔であった。渤海政権は彼らの盛んな生産・流通機能を対外的な交易活動にも包摂し利用したのである。いわば首領を頂点とする社会秩序・社会経済的組織をもとに、中華式の支配機構や律令諸制度を組み合わせて国家の骨格を作っていたのである。

10世紀以後、渤海末・女真初期の沿海地方では河北省定窯の陶磁器の出土が最も多いが、磁州窯・河南省鈞窯・陝西省耀州窯・福建省建窯などの唐から北宋・金代にかけての製品が沿海地方のシャイギンスカヤ山城・アナニエフカ土城をはじめ各地で出土する。ウスリースク市のユジノウスリースク土城では高麗青磁も出土するという。北宋銭の出土も目立つ。これら中国・朝鮮との交易の対価品は珍重される毛皮・人参・蜂蜜・馬・鷹（海東青）などであろう。渤海領域で展開した北東アジアから中国南部にかけての交易活動は、朝鮮半島への広がりなどもあって持続するのである。

こうして渤海は首領層が荷った交易活動を外交との絡みで活用した国家という一面を特質として指摘できよう。926年、この渤海国家は隣り合う契丹人（遼）に攻められ崩壊した。政治的首長としての各地の首領たちは依存する国家を喪失した。東北アジアのなかの渤海のエピローグである。しばらく契丹（東丹）の支配が続くが、代わって靺鞨（黒水）人の後裔の女真人が登場し、1115年には金を建国する。

〔注〕

- (1) 以下、本稿は主に拙稿「渤海国家の構造と特質」『朝鮮学報』170の趣旨をもとに、最近の各国での研究成果を加えて拡大したものである。
- (2) 最近の日本古代の靺鞨認識についての成果としては、馬一虹「古代日本対靺鞨的認識」『北方文物』2004-3参照。
- (3) 楊曉燕「唐代平盧軍与東北亜政局」『盛唐時代与東北亜政局』。
- (4) 陳全家ほか「黒竜江海林市細林河遺址出土的動物骨骼遺存研究」『考古』2004-7。
- (5) 赤羽目匡由「封敖作「与渤海王大霧震書」について」『東洋学報』85-3
- (6) 古畑徹「渤海の首領研究の方法をめぐって」『日本と渤海の歴史』
- (7) 宋基豪「渤海国首領的性質」『北方文物』2004-4。
- (8) 朱国忱ほか『渤海遺迹』
- (9) E・ゲルマン「交易過程における渤海・金・東夏の陶磁器の役割『サハリンから北東日本海域における古代・中世交流史の考古学的研究』
- (10) 呂英亭「宋麗関係与密州板橋鎮」『海交史研究』2003-2
- (11) 向井佑介・岡村秀典「雲岡石窟出土瓦の研究」『日本考古学協会第70回総会研究発表要旨』
- (12) 高倉洋彰「唐・新羅との門戸、大宰府」『モノから見た東アジアの交流』
- (13) 許曉東「遼代的琥珀工芸」『北方文物』2003-4
- (14) 最近のこの分野の成果としては、Susan Whitfield “THE SILK ROAD Trade, Travel, War and Faith” 参照。